

神戸建築学は、著名な建築家や研究者等を講師としてお招きしてご講演頂く講演会である。講演後には講師と神戸大学の院生・学部生との自由な討議の機会を設け、新たな環境創造における建築学の可能性を探る機会として開催している。2023年度では第50回目となる講演会を建築家の早野洋介先生をお呼びして行った。

## 神戸建築学 第50回 「みえない境界」

**早野 洋介** MADアーキテクト共同主宰

1977年愛知県生まれ。2000年早稲田大学理工学部材料工学科卒業、2001年早稲田大学芸術学校卒業後、2003年ロンドンAAスクールで建築学修士号を取得。ザハ・ハジド事務所を経て、2004年よりマ・ヤンソン(馬岩松)、ダン・チュン(党群)と共に中国・北京を拠点とするMADアーキテクトを共同主宰。東洋の思想を取り入れ建築の未来を模索し、人と自然、環境との情緒的関係を創造し、建築文化の在り方を探求している。東京大学、早稲田大学芸術学校にて非常勤講師を務め、ロンドンAAスクールにて外部有識者審査員を務める。代表作に「Tunnel of Light」(新潟)、アブソリュート・タワー(トロント)、ハルビン・オペラハウス(ハルビン)など。



魚は我々であり、我々は金魚である」と、いかに建築家として彼らの必要とするような形態を見つけるのか、一緒に寄り添いながらその形態を発見していくのか、という一つのプロセスとして、非常に大切なプロジェクトのひとつである。

### Absolute Towers

カナダのトロントにある2つの高層タワー。国際コンペの最終審査時に地元の新報に掲載された際、「モンロー・タワー」という愛称で人気を博したこともあり、コンペを勝ちとった。国際空港から市内へ行くときに通るゲートウェイとして、ファサードの扱いをツインタワーでどう変化させるかを検討した。また、卵型の平面図を微妙なスピード感を変えながら、たまにスピードを緩めて、ぐいっと曲がって上昇していくようなプランであり、内部をシェアウォールで持たせながら、ユニットが無限にできるのではなく、20種類程度に抑えるような操作を行った。Z方向に同じ一般階というものをリピートすることにより、新たな床面積を得ることが高層タワーの宿命であるならば、郊外という周りに空間がある場所で、高層ビルの未来について、トロントに新しい風景、新しい多様性の都市空間をどう作れるかを考えた。

### Ordos Museum

中国の内モンゴル自治区の博物館。オルドス市は、当時、経済成長期を迎えていて、旧都市が飽和状態になり、新しい都市中心部をブラジルのブラジリアみたいなマスタープランが練られており、地域性・場所性が失われていた。外部から建築的なスケールを感じさせない、都市広場として起伏する平面をつくることを目的とした。スロープの等高線に対して90度法線方向に身体を傾けて、地形と対話していく。三次曲面を持った建物を、数か月前まで羊を追っていた労働者と、パネル1枚ごとに剥がしては、切り出して、納めていくこともあった。設計とモノを作る現場のレベルが交わらない時代に、設計をどのように作りだし、使われていくことも含めて、フィードバックを得て考えるのかを強く学んだプロジェクトである。

### Harbin Opera House

ハルビン市は、中国北部、黒竜江省の首都で、北のロシアからの文化的影響が非常に強い都市である。冬が長い豪雪地である街を流れる川が東西に街を分断して市の中心地がかなり高密度化しており、新たに川の北側に対して開発を進め、湿地帯を含めた、北側の中心となるような文化複合施設の計画。冬が長い都市の中で、新しい音楽を体現する都市空間を意味する白いリボンが漂うような、そして静止がなくて、もう一つ新たな動きを行うような対話を含めた空間とした。湿地帯のため、建物からかなり引いた距離からまず建築の体験が始まる。湿地帯の中に起きた二つの雪山のような体験、そして、建物の前の広

[日時]

2023年11月22日(水) 17:00~19:00

[司会・進行]

後藤沙羅(助教)

[担当学生] ◎:代表

◎舟木健太郎 宮本莉奈 徳橋謙輔 北脇知花 石橋慶一郎 松森梨佳子 天谷貴仁  
芦田充 菅原慎司(B4) 北岡智也(B3) 芝崎琉(B3)

[参加者数(概算)]

90名

## 1.はじめに

今回早野先生には、8つのプロジェクトを通して、設計の思想やプロセスを説明していただいたが、本稿ではその思想や、特に多く言及されていたプロジェクトの要点を抜粋させていただきたいと思う。

## 2.講義概要

### Fish Tank

オフィスがあった北京郊外の近くで、おじさんが道に座りながら、発泡スチロールに多くの金魚をいれて売っているのを見かけた。我々は残念ながら金魚の声を聞くことはできないが、金魚はこんな環境に住みたくない、と我々建築家により良い住まい方・住環境を設計してくれと言われているような疑問が浮かんだ。金魚を数匹購入し、ガラスの箱に居れ、金魚の動きを分析した。内部の彼らが必要としない空間を外部に開放することができるのではないかと考え、ガラスキューブのある一面が内部に関して溶け出し、内部を貫通して逆側の壁に閉ざすことにより、内部の内部が外部化する細胞分裂の一番初めのような状態をつくった。当時、まだ3Dプリンターもなく、STLという技術を使って3次元で打ち出し、水を入れ、金魚を入れると、彼らはいろんなかたちでこの内部を漂った。それが本当に彼らにとっていい環境になったかどうか、我々は決してわかることはないが、「やはり金

場、高さ36m、16mのフライタワーをつなぐ建物の被膜にかけられた、徐々に起伏を上げていく遊歩道。それはチケットを買わなくとも、人が自由に入ってくると、徐々に高度、視線、視界が開けてくる。そして湿地帯から川へと視界が開けていき、かつての旧市街、中央屋上庭園を望む風景がある。この場所があることにより、ここに住む人がこの都市の風景を新たに認識し、この場所が彼らの都市の一部だというような場所になることが非常に重要である。

### Clover House

愛知県岡崎市にある語学学校と保育園が一体になった語学的な障害を取り除くような教育施設。木造の住宅フレームを残して、新しい皮膚のフレームで覆うことで、外部の凡庸たる田園都市風景住宅風景のスケールを少し異化させて、そしてただしその中に馴染みながら前方の田園風景に溶け込むような新しい風景、少し風景の異化作用を行う。角のところには全く違った建築的操作で切り取られたところから、人が入ってくると、かつての住宅フレームがうっすら見えてくる。それを上ってくると階段のところで見えてきた立派な梁が現れ、新しいフレームのところ子どもたちの声は聞こえるんだけど、姿は見えない。これも全ての部屋が二方向以上行けるようになっていて、いろんなところで誰かが何かをしている。小さいスケールながら、いかに風景にアプローチするかを考えた。

### Wormhole Library

中国の南、海口市の図書館。小さい規模のプロジェクトだが、公共の意味合いがかなり強く、水辺・水際に建つ建築はどのようなものかを考え、多孔質の石に着想を得た。多孔質の石は、ある形から、水が押し寄せることによって、水の水圧が作った形、水の水圧をどう流すかということによって内部に孔ができる。その環境にいかに適応した形だからこそ、水、風、空気、湿気も入ってくるような形をしている。おそらく人類がやった現場打ちコンクリートの最も複雑な形状の建物。いわゆる床壁、天井というような区切りがない中で、人が流動しながら、いかに内部のもの、外部のものが入り込んで中の外部を曖昧にした空間を体験していく。コンクリートの液体性という形がないものに、我々はフレームを与えて形状化してきたという歴史があった。現代だからこそできるコンクリートの表現、ポジを作ってるのか、ネガを作ってるのか、非常に複雑な現場の施工者ですら、おそらく理解できないような、デジタルがなくてもアナログがなくても成り立たない現場の在り方を実践し、コンクリートの表面を仕上げた。そして表面の最後の一枚が、人が最後に触る逆側の転写された表面になるということを感じながら、徐々に型枠が外れたときに、中に作られたネガの形が現れる。自然に空気が抜けることができなかった気泡が転写されてきて、そこに人が座ってふと手を触れたときにこれは何だ？と感じたときに、おそらく記憶が作られるだろう。

### FENIX Museum of Migration

ロッテルダムは、かつてヨーロッパから移民がアメリカに向かう出発地となった都市であった。ここからどんな新しい生活が、どんな航海が待っているかわからない。その激しい嵐の中を突き抜けて、新世界の風景を眺めた当時の移民の人々の気持ちを我々が体験するような場所をつくりたいという思いで設計した。特殊な職能のプロフェッショナルと一緒に、当時の資料をいろんなところから探してきて、歴史の中で足されてきた要素をまずは当初のものとしてそぎ落とした。内部から突き出すような遊歩道は、ベルギーで巨大な鉄鋼から製作した。FRPの型枠に鏡面仕上げのものを入れ込み、船で持込み、吊り上げて建物へ挿入する。ヨーロッパの地続きとしてもものがどう作られているか、我々が初めて知ったウクライナがどれだけ世界の鉄鋼の中で大きな意味合いを持っているのかということ学ぶプロジェクトでもあった。

### Tunnel of Light

新潟県の大地の芸術祭での清津郷溪谷トンネルのプロジェクト。このトンネルは深海の中からピュッと水面に出された潜望鏡で、我々の感覚を拡張して外部と交信するような役割を果たしている。第4の見晴らし所は水盤を張って、鈍い反射のステンレススティールを張ることにより、内部と外部がとても曖昧に接続するような、外部を内部に取り込むような空間。そして、真ん中に川が流れているように見えるのは、外の空の反射である。非常に細かくパネル割りをどうするか、反射度をどう考えるか、水盤のこの水面の波紋・揺らぎを設計するのかということをも研究し設計した。そして徐々にこの20mの空間をどう使うのか感じながら、靴を脱いで中に入ってもらおう。それはなぜかという、外の清津川の雪解け水をポンプアップして使っているの、夏場でも14度ぐらいかなり冷たい靴を脱いで中に入ると、ほとんど止まっていることができない。そのため、人は歩き回る。それによって波紋ができ、風景が揺らぐ。

### 3.担当学生考察

今回の講演を聞き、いわゆる「境界線」で仕切った内側への設計では太刀打ちできない時代に突入していることがわかった。早野先生の言葉から、設計に携わる人は様々なかたちで社会との広い関わりを持ち、何らかの意図を持って風景を創り出す役割を担っていると感じた。境界を越え、未来を考えることが我々の世代にとっての重要な責任ではないだろうか。(文責:舟木健太郎、宮本莉奈)

